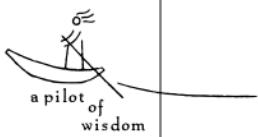


音と光の世紀
ラジオ・テレビの100年史

原 真
Hara Shin



第1章 ラジオの産声

- 1 無線電話の音声に仰天 米国で世界初のラジオ放送
- 2 欧州では電話でオペラ聴く 不思議なラジオに大衆熱狂
- 3 ラジオは民営で、と日本政府 大震災受け制度化急ぐ
- 4 東京からラジオ第一声 広告禁止、料金を徴収
- 5 アマチュアがブームを先導 広がった自作受信機
- 6 全国放送のため3局を統合 社団法人日本放送協会に
- 7 浪花節をそのまま流す 活弁が映画を再現

第2章

戦争への道

- ラジオならではのドラマ 音だけで広い世界を表現
記者なしでニュースを放送 厳しい検閲で電波遮断も
カラスが1羽、前畑ガンバレ 放送とスポーツの蜜月
- 多彩な教育番組を編成 時局の影差すラジオ体操
盛んだったローカル番組 全国放送網整備で均質化
ラジオが大衆を指導 大阪から次々新企画生む
聴取料は放送局が徴収 省益優先で立法避ける
二・二六で影響力發揮 放送協会への統制強化
戦時放送体制が確立 日中戦争を前線から実況
でたらめな大本営発表 放送は戦争完遂に邁進
全身全霊で国民を動員 アナウンスは雄たけび調に
対敵宣伝の「姿なき武器」 戦争で拡大した海外放送

第3章

放送の民主化

- 21 20 天皇の肉声で敗戦受け入れ 軍は録音盤奪取に動く
受信機はガラパゴス化 戰争が普及を後押し
- 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 独占的な放送協会を維持 民主化うたつたG H Q
連合国軍批判を禁じ検閲 放送時刻厳守で聴取習慣
戦争の罪を自覚させる G H Q企画の「真相はこうだ」
女性に政治参加を訴える 「婦人の時間」
マイクを市民に開放 「街頭録音」「のど自慢」
政府から圧迫、打ち切りに 時事風刺の「日曜娯楽版」
民放設立運動は停滞 遅信院の陽動作戦も
G H Qが民放容認に転換 新放送法制の骨格示す
独立行政委が放送を監督 電波三法が施行
番組準則違反で行政処分? 占領終了で電波監理委廃止

第4章

テレビ誕生

- 33 32 公共放送NHKが誕生 権力追従の体質残る
初の民放が開局 全国に広がるフリーラジオ
- 34 多様だつたテレビ黎明期 電子式のラジオ型に集約
大衆の欲望を熟知し推進 街頭テレビが威力示す
35 36 37 38 39 40 41 42 43 テレビネットワークを形成 ローカル番組は減少
受像機は驚異的速度で普及 小型に集中して値下がり
ラジオ直系の制作手法 テレビドキュメンタリー
融通無碍で何でもあり 未完のバラエティー
新たな芸術ジャンルを開拓 「鉄腕アトム」に始まるアニメ
ありのままの魅力伝える ゴシップに傾くワイドショー
五輪と共に進化 テレビのスポーツ中継
特撮で世界を魅了 怪獣続々の「ウルトラマン」

第5章

- 44 電気紙芝居から芸術へ ドラマ「私は貝になりたい」
45 青森から広まつたローカルワイド 地方局独自の活動も
46 報道の表現を広げた 「ニュースステーション」の挑戦
47 価値観の転換も訴えたCM 局は徹底して視聴率追求

局内外のせめぎ合い

- 48 強大化した芸能事務所 ジャニーズ、吉本で不祥事
49 独立制作会社が登場 テレビ以外にも進出
50 「一億総白痴化」と批判 教育局発足、「博知化」に貢献
51 強まる政治的压力 押されて自主規制を強化
52 政治に翻弄されるNHK 受信料値下げし縮小へ
53 番組準則の解釈を変更 処分前段階の行政指導を連発
54 民放廃止を検討 安倍政権の放送改革方針

第6章 デジタルの大波

- 55 受信機ゼロでスタートのFM AMは深夜放送が本格化
56 高画質放送で欧米に衝撃 NHKのBSハイビジョン
57 郵政省局長が方針転換 テレビをデジタル化
58 サービス広げるCATV 多チャンネル、ネット、電話
59 黒船襲来、IT企業も テレビ局買収の動き相次ぐ
60 急成長するTVer ネット動画がテレビを侵食

おわりに

はじめに

2025年3月22日、日本で放送が始まって100年の節目を迎えた。

ラジオの登場で、マスコミュニケーションは大きく変わった。すでに存在していた新聞や雑誌に比べ、ラジオは桁違いに多くの人へ、圧倒的な速さで、ニュースをはじめとする情報を伝えられる。音声によって、歌やドラマなど多彩な番組を届けることもできる。

だが、その強大な影響力は、人々を戦争へ駆り立てるのにも、徹底的に利用された。

映像を伴うテレビは、家庭にいながら、あらゆるものを見ることが可能にした。手軽な娯楽として、敗戦後の貧しい日本でも、驚くほどのスピードで普及する。内容が低俗だと批判されることもあったが、市民が共有するべき情報を広め、民主主義の基盤を形成していく。CMを通じて消費を喚起し、高度経済成長の起爆剤にもなった。

テレビは、まさに「マスマディアの王様」だつたし、今なお多数の視聴者を集め。しかし、インターネットに押され、大きな曲がり角に立たされている。

そんなラジオ・テレビがどのように生まれ、発達してきたのか。1世紀にわたる放送史には、どんな人が、どう関わったのか。その流れを素描したのが本書である。現代の読者に、あまり知られていない戦前から占領期までは、ほぼ年代順に動きを追う。比較的なじみのありそうなテレビ放送開始以降は、テーマごとにたどつていく。

膨大な記録と長年の取材を基に、できる限り関係者の声を紹介しながら、生き生きとした「音と光の世紀」の再現を試みたい。

ラジオの産声

第1章

日本初のラジオ開局の挨拶をする東京放送局
総裁の後藤新平（中央）=1925年3月22日、東
京・芝浦の同局仮放送所
（『東京放送局沿革史』から）



1 無線電話の音声に仰天 米国で世界初のラジオ放送

「CQ、CQ」。全無線局を呼び出すモールス信号が入電した。「遭難した船か」。大西洋を行する船舶の通信士たちが、続々に耳を澄ませる。

聞こえてきたのは、話し声だった。さらに女性の歌、バイオリンの独奏……。

無線電信の「トン」「ツー」という信号しか聴取したことになかった人々は、音声が届いて仰天した。1906年のクリスマス・イブ。米国東部マサチューセッツ州プラントロックから、発明家レジナルド・フェッセンデンが実験した「無線電話」は、世界初のラジオ放送といわれる（アルビン・ハーロウ著『古い電線と新しい電波』）。

水越伸著『メディアの生成』によれば、第1次大戦が終わると、軍隊で通信に携わった技術者らが復員し、全米各地で無線電話を始めた。アマチュア無線家同士が電波を通じて会話をしたり、レコードの音楽を流したりしたのだ。

ペンシルベニア州ピッツバーグ周辺では、電機大手ウエスティングハウス・エレクトリック

の技術者による無線電話が人気を集めた。地元の百貨店は「空中のコンサートを、このラジオで聴ける」と、無線機の広告を新聞に出す（エリック・バーナウ著『バベルの塔』）。

これを見たウエスティングハウス副社長のハリー・デービスは、ひらめいた。「定時の放送サービスを提供すれば、受信機の売り上げとウエスティングハウスが出る広告の効果によつて、その経費を正当化するのに十分な関心を集めうるだろう」（ルウェリン・ホワイト著『米国のラジオ』）

ウエスティングハウスはピツツバーグにラジオ局KDKAを開設し、20年11月2日、定時放送をスタートさせる。同日行われた米大統領選の開票結果を速報し、話題を呼んだ。各地で次々にラジオ局が立ち上がる。

大量生産・大量消費の時代を迎へ、受信機は急速に広まつた。前掲『メディアの生成』によると、全米の世帯普及率は31年に50%を超えている。

通信大手AT&Tは傘下のラジオ局を専用回線で結んだ上で、この放送網を使って番組やCMを流す企業から、電話のように料金を取ることを計画。ラジオネットワークと広告放送の確立につながつた。

「無線電話を秘密の通信手段として発展させようとするのは間違いで、それは瞬間的に多くの人とコミュニケーションを取れる唯一の手段だ。そう考えれば、無限の可能性がある」（デービスほか著『ラジオ産業』）

1対1で双方向のコミュニケーションが基本の通信ではなく、1対多で一方向の放送が誕生した。ウエスティングハウスのデービスが指摘した通り、ラジオは革命的な技術だった。

2 欧州では電話でオペラ聴く 不思議なラジオに大衆熱狂

電線を介した有線の電信から、有線の電話、電波による無線電信、そして無線電話すなわちラジオ放送へ。電気メディアは直線的に発展してきたように見える。だが、実際の歴史には糺^う余曲折があつた。

1876年、米マサチューセッツ州ボストン。グラハム・ベルが研究室の送信機に向かって叫んだ。「ワトソン君、こっちに来てくれ。会いたい」。別の部屋で、受信機に耳を当てていた助手のトーマス・ワトソンは、研究室に戻り、「聞こえたし、理解できました」と告げた。電話が誕生した瞬間だ（ロバート・V・ブルース著『孤独の克服』）。